

# 陳舜臣さんを語る会通信

NO.107 Jul. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34  
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」  
Tel.078-911-1671  
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員  
発行日 2023年7月1日  
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

## 古今東西、歴史の知恵を模索するエッセイ20編 『歴史エッセイ 東眺西望』

本号では、『東眺西望』（1988 講談社）を取り上げました。初出は、講談社から刊行された『ビジュアル版世界の歴史』全20巻それぞれに添付された月報（1984年7月～1986年2月）です。（編集委員 橋雄三）

『東眺西望』「あとがき」抜粋引用  
傍線、小見出しは編集委員の加筆

### 東晋の文人習鑿齒のこと

「あとがき」冒頭、次の文章で始まる。四十年ほど前に読んだ詩に、いまだに忘れられない句がある。その前後の句は忘れてしまっているし、作詩者の名前さえ、どうしても思い出せない。かなり年をとった人らしく、雑誌にのせた回顧録のなかに、戦時中の自作の詩として引用したものだった。

### 山河羨殺習襄陽

習襄陽とは四世紀の東晋の文人習鑿齒のことである。襄陽とはその出身地で、彼のあざなは彦威といった。句中の「羨殺」の殺は、きわめてはげしい程度をあらわす助辞で、悩殺や黙殺と同じ用法である。襄陽の習さんがうらやましくてたまらない、という意味なのだ。それに「山河」ということばがかぶさっている。山河が主語なのか、あるいは山河をみて詩人がうらやむのか、どちらにもとれそ

### 『東眺西望』の意味・由来

「東眺西望」という成語は、習鑿齒の次の文章から生まれた。

西のかた隆中を望んでは臥竜の吟を想い、東のかた白沙を眺めては鳳雛の声を思う。北のかた樊城に臨んでは鄧老の高

きを存り、南のかた城邑を嘗みては羊公の風を懐う。檀溪に目を縦にしては崔・徐の友を念う。……

東西南北、どこをみても、史上の人物のことがしのばれ、一日じゅう徘徊、惆悵、躊躇し、そして涙を流して暮したと述懐しているのだ。隆中は襄陽の西郊にあり、臥竜と謳われた諸葛孔明が住み、劉備が三顧の礼を尽くした場所である。孔明はそこで、故郷の民謡「梁父吟」をくちずさんでいたという。いまは伏せているが、風雲を得れば昇天の竜となる臥竜は孔明で、それにたいし、いまはまだ鳳の雛だが、将来大成すると期待されていたのが龐統であった。のちに蜀漢に仕えた人物である。北のかた樊城に臨んで、習鑿齒が連想した鄧老とは、おそらく樊城の北の新野出身で、蜀の後主を降伏させた鄧艾のことであろう。（中略）このように目のふれるところ、すべてが史上の英傑たちとゆかりのある土地なのだ。「東眺西望」とは、四方を見まわして、歴史とのつながりをおもひ、感慨にふけることをいう。

どうして習さんが羨ましいのか

襄陽は南北分裂期の中国では、つねに南北の境界線にあった。東晋の版図であった襄陽が、北方の前秦に奪われたのは、太元四年（三七九）二月であった。苻堅はかねて名声の高かった僧道安と習鑿齒を長安に連行した。だが、習鑿齒は病氣のため、前秦治下の襄陽に帰郷することを

許された。東晋が襄陽を奪回したのは、苻堅が淝水で大敗した翌年、すなわち太元九年（三八四）四月のことで、習鑿齒はそのとき病床にあったようだ。敵に占領された故郷の襄陽が、再び祖国に復帰したのを、習鑿齒は生きているうちに、その目で見る事ができた。抗戦中、日本の占領地域にいた人が、習鑿齒を「羨殺」した心情はよくわかる。私にはその句が、忘れようにも忘れることができなかった。

### 『東眺西望』初出及びタイトル

一九八四年から一九八六年にかけて、講談社から刊行された全二十巻の『ビジュアル版・世界の歴史』に、私は毎巻、歴史エッセイを書いた。どこに目をやっても、歴史とのつながりをおもひだしたもののだった。そんなわけで、いま二十篇のエッセイを一冊にまとめるにあたって、「東眺西望」ということばをタイトルにえらぶことにした。

一九八八年早春

陳舜臣



講談社版 表紙

## 『東眺西望』 各編内容(1) 及び補足

『東眺西望』収録エッセイ20編の掲載順序は『ビジュアル版 世界の歴史』全20巻の配本順になっています。最初のエッセイ「光は東より」は、第13巻「大航海時代」付録月報掲載ですが、この巻が、第一回配本でした。逆に、第1巻「文明の誕生」は第四回配本だったので、付録月報に掲載されていた「人類のはてしない歩み」は、『東眺西望』では四番目になっています。下の表、「巻」は上述、『世界の歴史』の巻をあらわします。

| 題                              | 巻 | 各編内容 ■はキーワード                                                                                                                                                                                                                                                        |
|--------------------------------|---|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 光は東より<br>/「アジア」の大航海時代          | ⑬ | 「大航海時代」付録月報掲載。800年にわたるイスラム支配下にあったイベリア半島で、1492年、キリスト教徒による国土回復がなされた。また、後漢の時代に改良された中国の製紙技術は→サマルカンド→バグダード→イベリア半島と、イスラム文化圏を西進、十二世紀半ばのヨーロッパに伝わった。イベリア半島では、この素地の上に、ギリシャの哲学、自然科学、インドの数学、医学が花開いていた。大航海時代は、東西文化の交流の結果という面をもっている<br>■鄭和 マルコ・ポーロ 香料とキリスト教                       |
| 問われる意義<br>/第二次世界大戦と現代          | ⑭ | 「第二次世界大戦」付録月報掲載。1929年、アメリカで空前の経済恐慌が始まり、世界へと広がった。ルーズヴェルト大統領はニューディールと呼ばれる一連の政策をとり、第一次世界大戦の敗戦国ドイツのヒトラー、そして、戦勝国ではあったが犠牲の大きかったイタリアのムッソリーニは全体主義で対処しようとした。特にドイツは、ヨーロッパに覇を唱える作戦を大胆に進めた。結果、第二次世界大戦へと突き進む ■日独防共協定 日中戦争 スペイン戦争 日独伊三国同盟 ナチスのユダヤ人排斥 独ソ不可侵条約 「核」の登場 植民地の独立 冷戦     |
| 茶は世界を変える<br>/アメリカの独立と茶         | ⑮ | 「近代のアメリカ大陸」付録月報掲載。イギリスの植民地における、ボストン茶会事件(1773)、1775年に始まった独立戦争、そして、アメリカ合衆国の誕生に至る歴史を記述、そこにかかわる「茶」について言及 ■生活必需品・茶 七年戦争 砂糖条例 印紙条例 タウンゼント諸法 茶葉法案 独立宣言(1776)                                                                                                               |
| 人類のはてしない歩み<br>/「歴史」以前の重み       | ① | ここから、ほぼ、『ビジュアル版 世界の歴史』の巻の順となる。「文明の誕生」付録月報掲載。約50万年前に出現したと推定される北京原人、ジャワで発見されたピテcantロプス・エレクトゥス、ドイツで発見されたハイデルベルク人など、原人から説き起こし、ついで、約20万年前に出現した旧人ネアンデルタール人を語り、続いて、クロマニヨン人など、私たちの直接の祖先、新人(現生人類)に言及 ■道具をつくる 火を使用する ことばを話す 文字の発明 農耕・牧畜など生産力の向上 余剰 貧富の差 有能な指揮者 王朝の誕生 /岩宿遺跡の発見 |
| 無尽蔵の宝庫<br>/「遺丘」と粘土板文字          | ② | 「古代のオリエント」付録月報掲載。世界最古の文明を生んだ地、ティグリス・ユーフラテス両河にはさまれたメソポタミア。ここでの文明の担い手はシュメール人とされている。シュメール人は農耕、狩猟民とされるが、また、この地の半神半人神で初代の王ギルガメシュは牧羊神であるので、こちらの要素も濃厚であったことがわかる ■粘土板と楔形文字 日乾レンガの遺丘と焼成レンガのパベルの塔 メソポタミア南部のパピロニアと北部のアッシリア                                                     |
| 栄光のはじまりと継承<br>/ギリシャ・ローマからイスラムへ | ③ | 「ギリシャ・ローマの栄光」付録月報掲載。ギリシャ精神・ギリシャ文明をさすヘレニズムと、ユダヤ教、及びキリスト教思想の基本をなすヘブライズム、この二つがヨーロッパ思想の源流といわれる。ここでは、前者を中心に記述。まず、地中海文明の特色として、交易だけで食べていけるまちが少なくなく、農民にして都市生活者を中心とするポリスが誕生していったと説く ■神の支配、人間の支配 ギリシャ神話の神々 密集軍団ファランクス アレクサンドロス 民族大移動 ギリシャ・ローマを継いだイスラム                         |
| あやしい魅力<br>/インド史の底流             | ④ | 「悠久のインド」付録月報掲載。インドは、海と山にさえぎられた独特の亜大陸、別世界で、雑多・重層的な顔を持ち、一般的にはそれが、あやしい魅力ともなっている。ところで、若いころ、インドの言語を専攻し、インドに関心を寄せ続ける陳舜臣さんにとって、むしろそれは、親しみである ■インダス文明 ドラヴィタ語族 印欧語族 アーリヤ人 パラモン教 カースト 仏教 ヒンドゥー教 イスラム教 ムガル帝国                                                                   |

## 「問われる意義」補足

ヒトラー・ユーゲントは、一九三六年の日独防共協定の締結に伴い、日独青少年相互親善交歓事業の一環として一九三八年に来日し、90日間滞在、神戸にも来ました。「問われる意義」第二次世界大戦と現代」から引用します。

中学四年生のときであったと記憶している。私たち神戸の中学生はその歓迎にかり出された。ヒトラー・ユーゲントは、軍靴の音高らかに、神戸の突堤を行進した。まさに一糸みだれず、というみごときであった。帰校すると、配属将校に、「あれを見たか、おまえたちはなつとらん！」と、カツをいれられたことを、いまでもあざやかにおぼえている。世はナチス礼讃の声に満ちていて、私たちはヒトラー・ユーゲントを手本にせよと迫られていたのだ。

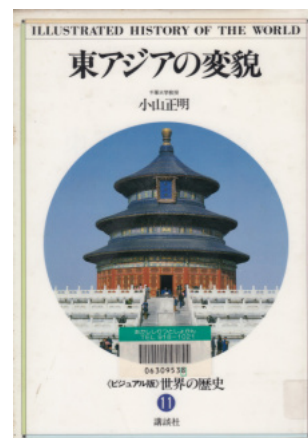
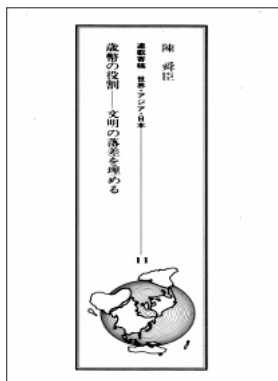


ヒトラー・ユーゲントの来日を報じる  
「国際写真新聞」 jqa2100.org



## 『東眺西望』 各編内容(2) 及び補足

| 題                           | 巻 | 各編内容 ■はキーワード                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|-----------------------------|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 点と点とのあいだ<br>/古代中国史の謎        | ⑤ | 「中国文明の成立」付録月報掲載。陳舜臣さんにとって、書き慣れた対象で、特に目新しい記述もない。ここでは、小見出しを列举するにとどめる ○古代史の点—発掘資料 ○殷墟と「夏墟」 ○龍山と殷墟を結ぶ点 ○殷と周 ○儒の理想—周文化 ○殷周革命から秦まで ○世界の驚異、始皇帝陵兵馬俑 ○兵馬俑の謎 ○殷・秦と周・漢 ○歴史の線引きの多様性                                                                                                                                                                          |
| タシュクルガン・アラムート<br>/二つのイスマイル派 | ⑥ | 「イスラム世界の発展」付録月報掲載。陳舜臣さんは、1979年、中国新疆ウイグル自治区、パミール山中のタシュクルガンを訪れる。ここで、住民タジク族が、イスラム教シーア派に属し、シーア派のなかでも最も過激とされるイスマイル派であることを知り感動する。陳さんとイスマイル派といえば、『桃源郷』の舞台にもなっているアラムートが思い浮かぶ。エッセイはその通りに展開する                                                                                                                                                              |
| ふしぎなデュエット<br>/ヨーロッパの光と影     | ⑦ | 「ヨーロッパの出現」付録月報掲載。冒頭、次のような記述ではじまる。中世は十二世紀、ふしぎな二重奏がきこえてくる。一方は「野蛮」と「狂信」であり、一方は「文明」であり「理知」である。そして、前者は十字軍に、後者はルネサンスに代表される。■レコンキスタ トレド大司教ライムンドウス トレドに製紙工房(1150) シチリア ヴェネツィア 古代ギリシャ語とラテン語                                                                                                                                                               |
| 分裂と断絶の奥<br>/「大唐の春」前史        | ⑧ | 「東アジアの世界帝国」付録月報掲載。後漢という統一王朝が崩壊して三国分立となり、東の間の統一ののち南北に分裂、北は「東晋十六国」という時期もあった。北方民族南下の時代である。この時代の積極精神として、陳舜臣さんは前秦の苻堅と北魏の孝文帝を高く評価する。分裂と断絶の時代に終止符を打ったのは、北魏—西魏—北周—隋—唐の系譜である                                                                                                                                                                              |
| 東と西を結ぶ糸<br>/ビザンツとモンゴルを継ぐ    | ⑨ | 「ビザンツとロシア・東欧」付録月報掲載。冒頭、325年のニカイア会議、431年のエフェソス会議など、キリスト教宗門内の勢力争い絡みの神学論争、そしてその過程で異端とされ追放されたネストリウス派について記述。追放されたネストリウス派は、東方、ササン朝ペルシャで勢力を得、更に、7世紀の中国に伝わったことは知られている。しかし、歴史の流れの主流になる時代はずっと遅れ、モンゴル族がユーラシア大陸で台頭するの時代にやってくる。陳舜臣さんはこのことを、「東と西を結ぶ糸」と表現する。このあたり、『チンギス・ハーンの一族』に詳しい ■プレスター・ジョン伝説 景教 会昌の法難 プラノ・カルピニ ルブルク モンテ・コルヴィノ                               |
| 草原の嵐<br>/遊牧と定住のドラマ          | ⑩ | 「草原とオアシス」付録月報掲載。このエッセイは要約が難しい。小見出しを列举するにとどめる。○草原のウイグル族 ○ウイグルの「族帳離散」 ○トルファン盆地 ○トカラ語の解説 ○天山南路の胡人 ○民族の総いれかえ ○草原の道 ○沙漠の道 ○騎馬民族の移動 ○元朝の色目人 ○ムガル帝国 ○サマルカンドの盛衰 ○ソグディアナとソグド語                                                                                                                                                                             |
| 歳幣の役割<br>/文明の落差を埋める         | ⑪ | 「東アジアの変貌」付録月報掲載。南北分裂を統一した隋のあと、唐、宋という長期政権が続く。唐は軍事力を背景に、版図は漢の全盛期よりひろがった。一方、宋は遼に燕雲十六州を占拠されたり、西北部に西夏王朝の存在をゆるしたりと、心細い王朝であった。しかし、人民の幸せの度合いという点で、陳舜臣さんは宋を高く評価し、弱体な軍事力を補った歳幣について考える。1004年、宋・遼は「澶淵(せんえん)の盟」という講和を結ぶが、これには、宋が歳幣として絹二十万匹、銀十両を贈るという条件が付いていた。ここで、陳さんは、歳幣は、与える側の屈辱であるが、結果的に文明の格差を埋める行為で、現在の途上国援助に通じるものがあるといい、国家間の落差の広がり、二十世紀の動乱の大きな原因をつくったともいう |



初出、『ビジュアル版世界の歴史⑪』及び付録月報の画像

次にあげる画像は右から順に、表紙の「北京の天壇祈念殿」、裏表紙の「故宮、寧寿門前の九龍壁」、付録月報です。

天壇祈念殿は、明朝から

清朝にかけて、皇帝が天に對して祭祀を行った祭壇。明の永樂帝時代の建造。

次の、故宮、寧寿門前瑠璃裝飾の壁、九龍壁は清の乾隆帝時代の建造。

本体の巻と付録月報の内容がちぐはぐ

上述、天壇祈念殿と九龍壁、二つの画像で⑪巻の内容を象徴しているところ、この巻は、十世紀以降の東アジアを扱い、明・清中心の記述になっています。

ところが、付録月報の陳舜臣さんのエッセイでは、唐・宋代を扱い、宋代を中心に「歳幣」の役割・意義を考える記述になっています。

陳舜臣さんのエッセイ二十編は、本体、『世界の歴史』につかず離れず、興味の向くままに語るといった内容です。

それが、陳舜臣さんの付録月報執筆の基本姿勢だったように思えます。

## 『東眺西望』 各編内容(3) 及び補足 ■はキーワード

|                          |   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|--------------------------|---|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 南海への道<br>/中国文献に見る東南アジア   | ⑫ | 「東南アジア世界の形成」付録月報掲載。このエッセイは、副題に「中国文献に見る東南アジア」とあるが、その通りの内容である。まず、東南アジアについての最古の記録として、『漢書』地理志を取り上げ、以下、必ずしも年代順ではないが、法顕の『仏国記』、康泰の『吳時外国伝』、朱庇の『扶南異物志』、『晋書』南蛮伝、『宋書』、『南齊書』、『梁書』、『隋書』南蛮伝、義浄の『南海寄帰内法伝』、『唐大和上東征伝』、慧超の『往五天竺国伝』、杜環の『経行記』と続く。そして最後、明の鄭和の南海大遠征で締めくくられる。ただ、この大遠征の記録は、成化帝の時代、兵部の劉大夏という人物によって破棄されたという。その意図は？               |
| 近代ヨーロッパとアジア<br>/風説書虚報の背景 | ⑭ | 「ヨーロッパの革命」付録月報掲載。徳川時代、毎年、長崎に来航するオランダ船は、幕府にたいして海外事情を略記した文書「オランダ風説書」を提出しなかった。風説書はほぼ正確に海外事情を伝えているが、オランダに都合の悪いところは、うまくかくしている。「都合の悪いところ」とは、大革命を経験したフランス軍の侵攻、それに続くナポレオンの勢力下、オランダという国が消えていた時期のことだ。この辺り、前後、ヨーロッパの歴史及び、東インド会社を通してのアジアへの影響などを詳述する ■バタヴィア共和国 ラッフルズ ゼーランド城                                                         |
| アジアの解放<br>/アジア思春期の二巨人    | ⑯ | 「アジアの民族運動」付録月報掲載。帝国主義の時代は、また、それに対する抵抗運動の激しい時代でもあった。陳舜臣さんがいう「アジア思春期の二巨人」とは、孫文(1866-1923)とガンディー(1869-1948)のことである。陳さんは、二人の重要な共通点として、若くして国を出、英語教育を受けたことをあげる。孫文は医者、ガンディーは弁護士資格を取る。更に、共に、外国での活動が認められた。一方、二人の大きな相違点は、祖国を解放する運動方法にあった。「革命家孫文」とは言っても、「非暴力、不服従」のガンディーを革命家とは言わない。時代の政治状況、並びに二人の思想・運動を記述する                         |
| 事件と情報伝達<br>/アヘン戦争と日本の開国  | ⑰ | 「東アジアの近代」付録月報掲載。日本は1854年、日米和親条約を結び、ついで、イギリス、ロシアと、更に翌年にはオランダとも和親条約を結び、鎖国政策に終止符を打った。ところで、日本の開国は、アヘン戦争敗北という大きな犠牲を払った中国の開国と比べ、格段に穏やかなものであった。この差にはいくつか理由が考えられる。まず、①中国は、イギリスとの間で、アヘン問題(人命、銀の流出)という重大事を抱えていた。②当時の中国人は、中華思想があって、外国に対する知識が少なかった。これに対し、日本には①のような深刻な問題はなく、②については、「オランダ風説書」などで、外国に対する知識を持ち、アヘン戦争の情報も得ており、適切な対応が取れた |
| エーゲ海の東と西<br>/帝国主義時代の民族意識 | ⑱ | 「帝国主義の時代」付録月報掲載。1870年代以後、欧米列強は植民地や勢力圏を求めて、近代化のおくれたアジア、アフリカ、ラテンアメリカに殺到した。この動きが帝国主義で、第一次世界大戦の原因となった。ところで、エッセイの題、「エーゲ海の東と西」の東はアナトリア・小アジアで、西はバルカン半島。帝国主義前夜から第一次世界大戦後までのエーゲ海の東と西の歴史・政局をオスマン・トルコ(1299-1922)の衰亡と絡めて記述する ■二つのパン・スラブ主義 ヨーロッパの火薬庫バルカン バルカンの民族解放運動 ギリシャの独立 クリミア戦争 大ギリシャ主義と大トルコ主義 トルコ革命 ケマル・アタチュルク                 |
| 歴史の節目<br>/現代史を生きる        | ⑳ | 「現代の世界」付録月報掲載。現代史の最も大きな節目は昭和二十年八月十五日で、陳舜臣さんの生涯の重大事件は作家になった昭和三十六年だという。昭和三十六年は、ケネディが大統領としての仕事を始めた年であり、隣の韓国では、李承晩から朴正熙に時代が変わり、キューバ、南ベトナムの情勢は風雲急を告げていた。自身は、はたして文筆だけで妻子を養って行けるのか不安を抱えながら、無我夢中で原稿用紙におかっていた ■キャンプ・デービッド会談 冷戦とデタントのまだら模様 六〇年安保闘争 キューバ危機 中ソ対立 日本の高度成長 米ソ宇宙開発競争 七〇年大阪万博                                          |

## 1914年頃のバルカンの民族分布



## スラヴ語系民族

- ロシア・ウクライナ人
- セルビア・クロアチア人
- ブルガリア・マケドニア人
- ドイツ人ほか

## ラテン語系民族

- イタリア人
- ルーマニア人
- その他の語系民族
- マジャール人
- アルバニア人

## ギリシア人

- トルコ人
  - 上記以外の民族
- 国境・分布は1914年当時

「エーゲ海の東と西」補足

バルカンの民族分布について、エッセイを引用します。

民族的にいて、セルビア、ブルガリア人などのスラブ系、ルーマニア、ギリシャ、アルバニア人などの非スラブ系があり、そこに支配者系のトルコ人がはいつている。おなじスラブ系でもセルビア人は南スラブ系で、ウクライナ人などの東スラブ系の住民もまじっている。